九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国米脂県古城における窰洞四合院の建築的特徴と雑院化の意味

王，夢瑩

https://hdl.handle.net/2324/4474922

出版情報：九州大学，2020，博士（工学），課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式３）

氏　　名　：王　夢瑩

論 文 名　：中国米脂県古城における窰洞四合院の建築的特徴と雑院化の意味

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

米脂県古城に関する歴史上の記録は宋時代からあり、一帯には明時代末期以降に建設され、原始的な穴居から発展した靠山式窰洞とそれを地上に構築した地上式窰洞の住居群が広がっている。地上式窰洞住居の多くは中庭の四周に住棟が配置される四合院形式を持ち、母屋が地上式窰洞、別の棟が地上式窰洞あるいは木造・煉瓦壁の「房」で構成されており、本稿ではこれを窰洞四合院とする。当初大家族が住んでいた1院の窰洞四合院は、社会の変化に伴って住居の所有権が分割され、部屋の増改築が行われ、数家族が共同利用するようになった。本稿では、このように伝統的な居住様式が解体される過程を雑院化とする。

中国ではこうした歴史的建築物を保護する制度は整備されているものの、米脂県古城については、特に民家レベルでの基礎的な研究が十分にされておらず、歴史的資産の今後の保存活用を検討するに当たって、この地における窰洞四合院の建築的特徴と意味を理解し、雑院化の現状を分析することが重要である。本研究では、米脂県古城の窰洞四合院について、歴史的な成立経緯、空間構成、構造、構法、環境特性といった建築の持つ特徴を明らかにするとともに、伝統的な居住形式から現在のような雑院化に至る過程とその現代的な意味を明らかにすることを目的とする。

本論文は7章からなり、各章における論述の概要は以下のとおりである。

第1章では、本論文の背景と先行研究の検討を踏まえた本研究の位置付けと目的を述べ、さらに調査地域の概要、調査と研究の方法について述べた。

第2章では、米脂県古城における窰洞住居の発展過程と窰洞四合院の成立について考察した。宋時代から建設された靠山式窰洞住居は、明時代から石を主な構造材とする地上式窰洞となり、清時代、中華民国時代にかけて裕福な商人の住居として多くの小規模な窰洞四合院が建設されて街を形作った。さらに中華人民共和国の建国後は、単位が所有する一列の煉瓦造窰洞が建設された。こうした窰洞住居は、時代とともに孔の形や大きさが規格化され、壁が薄くなって空間が効率的に確保できるようになってきた一方で、孔の間口や大きさ自体には大きな変化がなかった。

明時代末から米脂県と山西省との交流が盛んになり、山西の職人が四合院の技術を米脂県に伝えていたことから、本事例は山西省のものを先例としていたと考えられる。四合院の平面構成自体は山西省のものと大差はないものの、本事例ではより窰洞棟が用いられる割合が高い。

第3章では、他地域四合院との比較を通して、米脂県窰洞四合院の空間構成の特徴について考察した。窰洞四合院では中庭の周囲を4つの棟が囲んでいる。窰洞棟は蓄熱性と耐久性が高く持続的に利用できるという特徴があり、住民はそのことを昔も今も強く意識していた。四合院の平面構成として主に接客用に使われた庁窰/房の配置が他の事例とは異なることを指摘したが、その背景

は不明である。また、米脂県の都市規模は北京や平遥より小さく、窰洞四合院の規模も二つに分かれた中庭がある2進までの小さなものである。現在では、住民はこの中庭の区画を明確に意識しておらず、1つの中庭として認識している。

第4章では、構造、構法と環境性能の視点から、四合院を構成している各棟の型式を分析した。各棟は、構法によって屋根まで石と土で作られた窰と主に煉瓦壁と木造屋根で作られた房に区分できる。窰は孔が平行に並ぶ独立孔型と孔が交差して一体的な空間となる交差孔型に分けられ、房は奥に小窰を設置する小窰＋煉瓦造型と煉瓦造型に分けられる。小窰＋煉瓦造型は清時代道光年以後に建設された他地域には見られない型式であり、棟の一部を断熱性能の優れた窰洞としつつも、一部を広い空間の取れる木造・煉瓦壁にして両者の利点を生かしたものだと考えられる。

第5章では、四合院の多世帯共同利用の実態について考察した。1948年に行われた土地改革を機に四合院の所有権が分割され、1家族の住居は数家族共同で居住することとなった。1990年代以降は、家族人数の減少に伴う住居の賃貸化が始まり、現在では居住者の約3/4が賃貸世帯である。四合院の所有と利用の関係は大きく5つの型に分けられるが、8割以上の院では所有権も分割されて多世帯が共同で所有している。結果として、1院当たりの平均居住世帯数は7.74世帯と非常に多くなっている。各院において、各部屋は世帯ごとの私用空間だが、水道と便所のある中庭は共用空間となっている。共用空間を維持のための掃除と維持のルールがあり、互助の仕組みによって院ごとのコミュニティが形成されている。

第6章では、米脂四合院の増改築過程について考察した。棟ごとに建て替えた事例を見ると、窰洞を建て替えたものはなく、木造・煉瓦壁の房がRC造の平房あるいは窰洞に建て替えられていた。これは住民の窰洞に対する高い評価と愛着を裏付けている。他地域と比較したとき、木造・煉瓦壁の北京四合院では、改修が容易なために大がかりな増築や間仕りを作る事例が多いが、本事例の窰洞では空間をさらに細かく分けることができず、1孔の窰洞が生活空間の最小単位として使われ続けていることが特徴的である。

第7章では、各章での成果をまとめて結論とする。米脂窰洞四合院では、各室を個室空間とし、中庭を共用する現代的なシェアハウスのような使われ方が大多数となっている。また、窰洞の高い居住性と歴史的なイメージは現在でも住民に評価されている。窰洞の強固で安定した構造と明確な空間単位は、偶然にも核家族化と個別化が進んできた現代社会に適合していると言え、窰洞四合院の保存活用にあたって、現在のコミュニティを維持しながら計画する可能性を指摘した。一方、一部では中庭に壁や入り口を設けて院子を分割した事例も見られた。中庭を囲んだ共同体という伝統的な型式が崩れつつあると言え、大きな課題として指摘した。